

レジリエント・ヘルスケア入門 擾乱と制約下で柔軟に対応する力

中島和江(編著)

がん研有明病院病院長

佐野 武

医療安全にもたらすであろう 新しい構図を予感できる

「レジリエント resilient」とは聴きなれない単語である。医学用語でもない。辞書には、「回復の早い、弾力性のある、柔軟な」とある。では「レジリエント・ヘルスケア」とは何か。この入門書を読めばその意味がわかり、そのコンセプトが医療安全にもたらすであろう新しい構図を予感できる。

多くの職種が参加する現代の医療行為は、さまざまな要因が非常に複雑に絡みあって成立している。何か問題が起きた時、従来の医療安全管理の手法では、「失敗」に着目してその原因を突き止め、それを改善することで間違いをなくそうとする。これに対しレジリエント・ヘルスケアの世界では、逆に個々の医療プロセスが「なぜうまくいっているのか」に着目し、その要因を解析して生かすことで、より安全なシステムを構築しようというのである。

複数の人間が自分の職責を自覚し遂行した結果として、一つの医療行為が完結する。何か予定外の環境変化が起きたとしても、個々人が工夫を凝らすことで大事に至らずに解決できる。そうした「弾力性に富む組織」を作ることができれば、あらゆる出来事に対してその時点で最善の対応が可能となるであろう。

言われてみればまさに「目から鱗」の発想である。だがその実践となると容易ではあるまい。外科医の視点から言うと、トラブルが起こった手術の問題点を指摘することは比較的容易である。しかしそのトラブルはしばしば再発する。これに対し、何事もなくスムーズに進む手術は、実は一つひとつの手技の裏に外科医チームの深い配慮と技術が詰まっていることが多く、こうしたチームでは初歩的なトラブルは起きないし、繰り返さない。しかし歯がゆいことに、スムーズな手

術がなぜスムーズなのかを解析して伝えることは容易ではない。

特定機能病院の医療管理者である私には、医療安全は重要課題である。月に数百枚上がって来るインシデント・アクシデント(IA)レポートに目を通しながら、医療の複雑さと、エラーから逃れられないヒューマンのもろさを毎日痛感している。なぜ人はいつまでも同じ間違いを繰り返すのか。間違いの原因を突き止め、仕組みを見直し、チェックシステムを構築しても、なぜその間隙を縫うようにして次の間違いが起こるのか。この硬直した手法から抜け出て、新しい視点から医療行為を解析し、安全性を高めようというのがレジリエント・ヘルスケアである。その具体的手順はいまだ発展段階にあると思われるが、大いに期待したいし、その応用で「スムーズにいく手術の極意」を伝えられるようになるかもしれない。

免疫チェックポイントの解明でノーベル賞を受賞した本庶佑博士の講演を思い出す。がんの遺伝子変異をピンポイントに攻撃する分子標的薬は確かに有効であるが、次々と起こる変異への対応には限界がある。これに対し、洗練された免疫療法は弾力性に富み、どのような変異にもダイナミックに対応できるのだ、と。これこそ正に、レジリエント・ヘルスケアが求めるものではないか。



●B5/頁 224/2019 年
定価：本体 3,200 円＋税
[ISBN978-4-260-02828-8]
医学書院 刊